

創立記念礼拝

愛して、愛し抜かれる主に従って

2021年9月18日

立教大学総長・キリスト教学校教育同盟理事長

西原 廉太先生

聖書:ヨハネによる福音書 13章1節-8節

¹さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。²夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。³イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、⁴食事の席から立ちあがって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。⁵それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。⁶シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださいのですか」と言った。⁷イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。⁸ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。

父と子と聖霊のみ名によって。アーメン

本日は、宮城学院のみなさまが大切にされてきた創立記念礼拝の説教者、また後ほどは講演者としてお招きいただき、心より感謝申し上げます。

宮城学院は1886年のまさに本日、9月18日に創立され、私たちはこの時に、宮城学院創立135周年を祝う記念礼拝を共々に過ごしております。あらためまして、創立135周年、誠におめでとうございます。その道行きの中には数回の大震災、戦争、疫病といった困難がありました。そして、今、新型コロナウイルス感染症の蔓延、世界的パンデミックという、これもこれまで私たちが経験したことのない状況に直面しています。本日の創立記念礼拝も本来はもちろん学院のキャンパスで行われるはずでしたが、このような形でオンラインでの実施となりました。しかしながら、幾度とない危機的な事態の中にあっても、主はこの宮城学院をいつもお守りくださり、この135年に及ぶ旅を、導いてくださいました。そのことに、私たちは何よりもまず、私たちの主なる神さまに感謝をささげたいのであります。

さて、本年は東日本大震災からちょうど10年の一つの節目の年であります。今から10年前の2011年3月11日。宮城学院のみなさまも大きな被害を受けられまし

た。大変残念なことに、大学生がお二人、大学入学を予定されていた方がお一人、亡くられました。同窓生の方の犠牲者も20名を超えると伺いました。学生、生徒の中には、家が全壊、半壊したり、ご家族が亡くなったり、保護者の職場が津波で失われるなど、被災者は400名ほどもおられました。また、宮城学院をあげて支援、救援活動に取り組み、多くの学生のみなさんもボランティア活動をされました。

10年前の3月11日、私は東京の立教大学におりました。ちょうど理事会が午後3時から始まる直前でした。書類は倒れライトは大きく揺れ、テレビをつけるとそこには大きな津波が人々を飲み込もうとしていました。都内の交通機関も麻痺し立教のキャンパスを開放しました。5千人近い人々と、私も大学で夜を明かしました。翌朝には、すでに言語を絶する状況が明らかになりつつありました。詩篇詩人の、苦難を前にして、舌が上あごに張りついて、神に祈ることすらできないという嘆きそのものの経験であったのです。

ある女性の証言が耳から離れません。大津波から逃げようと高台に向かっている時、後ろを振り返ると、数人の小学生たちが泣き叫びながら必死に走っていた。しかし、次に振り返った時には、もうその子たちの姿は消えていたといいます。ある男の子は、行方不明になった両親、兄妹の名前を段ボールに書いて避難所をまわっていました。この現実を前にして、私たちは茫然とするばかりでありました。

そして、地震と津波に加えて、さらなる恐怖が襲うことになりました。福島第一原発の原子炉群の爆発、制御不能と高濃度放射能拡散であります。当時、学者たちは「人体に影響がないレベル」とさかんに喧伝していましたが、私が工学部時代に学んだことは、それは急性障害が出るか否かだけで、人体にまったく影響がない放射能などないということでした。実は4年前に、福島原発は、チリ級津波が発生した際には冷却材喪失による過酷事故の可能性があると国会でも指摘されていたのです。そういう意味では、この原発事故はまったくの人災であったことを私たちは忘れてはなりません。

復興庁が一昨年1月にまとめた震災による避難生活者は約5万4000人。しかし、福島県は17年3月末をもって、避難指示区域外から全国に避難している「自主避難者」への住宅無償提供を打ち切り、このタイミングで避難先の各市町村が自主避難者の多くを「避難者」に計上しなくなりました。そのため、公的な数字としての避難者数は大きく減っているだけで、実際のさらに多くの方々が避難せざるを得ない状況に置かれているのです。未だプレハブ型仮設住宅での生活を余儀なくされている被災者が数多くおられます。

当時、私は、立教大学副総長として、立教大学東日本大震災復興支援本部長を担いました。その関係もあり、震災直後から何度も被災地には足を運びました。震災から一年が立った頃でしたが、宮城県山元町にある私立ふじ幼稚園を、ちょうど来日されていたカナダ聖公会の大主教と共に訪問しました。このふじ幼稚園では、

園児 51 人が、幼稚園の送迎バスごと津波に巻き込まれ、その内、園児 8 人と、職員さんお一人も亡くなりました。この命を落とされた職員さん、中曾順子さんが日本聖公会東北教区の磯山聖ヨハネ教会の信徒さんでもあったからです。

11 日の地震直後、建物の中は危ないと、付き添いの職員とともに園児らは大小 2 台のバスに分乗。園庭に避難していたところを、津波が襲いました。園児 33 人が乗った大型バスは園内のブロック塀に引っ掛かって止まり、18 人がいた小型バスは園から数百メートル離れた民家まで流されました。濁流にのまれた車内は、天井近くまで水位が上がったと言います。中曾さんら職員はドアを開け、バスの屋根に園児らを引き上げました。大型バスにいた職員のお一人は、「バスの中で、浮いている子を外に出すので精いっぱい。それでも、手で水中を探り、感触のあった 2 人をリュックや服をつかんで外に出した」と振り返っておられます。波が引いたのを見て、それぞれのバスから、園舎や民家の 2 階に逃れた。だが、大型バスでは園児 7 人が不明となり、小型バスでは園児 1 人と、中曾順子さんが絶命されました。

私がふじ幼稚園を訪問した時には、すでに別の場所で新園舎がユニセフなどの援助で完成し、園児たちもそちらに移っていたために、旧園舎には子どもたちの姿はありませんでした。しかし、園の玄関に一杯に飾られた千羽鶴の前で、私たちは、当時の話を伺いました。8 人の子どもたちが幼い命を落としたことを聞き、言葉が出ませんでした。中曾順子さんは、園児を抱きかかえながら、子どもたちを守りながら、けれども、次の日の朝まで生きることではできなかった。私は、そのお話をカナダの大主教のために通訳しながら、通訳者としては完全に失格なのですが、言葉に詰まってしまい、涙が止まりませんでした。大主教もずっと泣いておられました。

園庭の片隅に、8 人の小さな石のお地蔵さんがありました。それは、小さな命を奪われてしまった子どもたちを覚えて、置かれたものでありました。園長先生が毎日ここに来て、この 8 人のお地蔵たちにお祈りをされている、とのことであつたのです。

2012 年 5 月に行われた日本聖公会総会における開会聖餐式での、当時の日本聖公会東北教区主教であられた加藤博道主教の説教は、深い洞察を私たちに与えてくれました。加藤主教のお連れ合いの加藤晶子さんは、宮城学院のオルガニストもお努めです。加藤主教はその時に、このように語られました。

「圧倒的な暴力と破滅的な状況の中で、なお『畑を買い、証人を立てよ』と主は言われる。人が生きていくという営みは『にもかかわらず』、圧倒的に希望を奪われた状況の中でも、続けられていく、『続けるようにと』主が言われるというのです。やはりそこには神の祝福、命の喜びがあるのだということを教会が語るならば、それは本当に、『にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声』なのだと思います。」

「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」。この、「にもかかわらず」というところに、私たちの使命があるように思います。それがたとえ一見無力であつたとしても、悲劇に満たされたこの世界、社会、絶望の内にある人々に対して、「にもかかわら

ず」、神の祝福、くいのちの喜びを、語り続けること。それがたとえ、か細い声、小さな祈りであったとしても、語り続けること。それこそが、私たちの担うべきミッション、使命なのだ、ということ、私たちは、学んだのであります。

震災直後の2011年4月8日に東京・四ツ谷のカトリックの女子修道会幼きイエス会を会場に、震災で犠牲となった方々を覚えるテゼの歌による祈りの集いに参加しました。その時に、被災地でボランティア活動に従事していた聖公会の信徒さんの向井清子さんという方のメッセージが朗読されました。私は、今でも、震災関係で読み聴いた無数のキリスト教関係の言葉の中でも、最も深い神学的洞察を持っていたものだとは確信しています。少し長くなりますが、ご紹介させていただきたいと思います。

「みなさん、こんばんは。今、この時に東京と仙台で互いに地震被災者のために祈り合っているという事をうれしく思います。

私は今、日本財団の支援を受け、ボランティアとして4月3日から宮城県七ヶ浜町(しちがはままち)に来ています。この地域では500戸が津波でながされ壊滅状態、1200名が現在も避難所で生活する地域です。私の仕事は、お風呂に入れない人びとに足浴させ、「話を聴く」というストレスケアの仕事です。この仕事では、被災者の話に耳を傾けるということが非常に大切です。私が質問をするのではなく、また私の話を聴いてもらうのでもなく。何も話したくない方には沈黙に寄り添い、涙を流し続ける方には黙ってそのまま手や皮膚を触れ続けるのです。たった10分から15分の時を被災者と共に過ごします。

私が、特別にこのボランティアを選んだのにはちょっとした導きがあったように思います。NHKのニュースで足湯のボランティアの存在を知りました。疲れた人々に足湯をしお話を聴いているその姿は、ヨハネ福音書の中で、イエスさまが弟子たちの足を洗っている姿のように見え、また今は大斎節中ですので、洗足の実践は私にとって、これ以上ないよい働きのように思われたのです。

こちらでは本当にたくさんのお話を聴きました。たくさんの人に足湯をし、皮膚をなでました。ある人は津波が押し寄せ、車の中に水が入り、身体も濡れ、だれもない壊滅地区の壊れた家の中で、寒い夜を過ごすことになり、とても寂しく怖かったと言いました。同行した同僚は見つかっていないそうです。ある人は、足湯をした途端にほっとしたのか「ただただ泣けてきて。涙が出てくるね」と泣きじゃくりながら言いました。ある人は足湯すらできないで「本当にひとりになってしまった」とひと言つぶやいた後、黙りこんでしまいました。ある子どもは「私なんだか突然いらいらするの」と言いました。その子は大きくなったら仙台市内の天文台で働きたいそうです。

この人たちの物語に触れながら、もう3週間もお風呂に入ることができない人たちの足や腕を眺めると、ひとりひとりの肌や足、手のひらの形が異なり、そしてそれはとても汚れていて確かに温かく、自分の中で深い愛情と憐れみの気持ちが溢れる出すような、そんな静かな感動を覚えて涙が出そうになります。多くの被災者たちは足湯を終

えると、私の膝に足を置いて拭いてもらうのを、とても恥ずかしがります。お風呂に入っておらずとても汚れているからですが、そんな時、私はその被災者の恥ずかしく思う気持ち、大変尊いもののように感じるのです。10分前までは他人だった私たちが、その弱さや恥ずかしさ、辛かった物語を共有することで、深い関わりをもったような気になるからです。

「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(ヨハネ 13:1)

「愛して、愛し抜かれた」。こんなに強く深い愛情の表現として、弟子たちの足を洗ったイエスさまのその深い愛情が私にも少し分かったような気がするのです。しかし一方で、このような感動を経験しながらも、災難に合った被災者の物語や身体には愛情を覚えても、自らの日常の中で他者を愛していくことができるのだろうかとも思います。身近であればあるほど疎ましく思い、優しくすることを忘れ、思いやりからは遠く離れたところにいるこの普段の「私」が、いつも常に問われ続けているのです。

同じボランティアチームの中に、19歳の時、阪神淡路大震災で家が全倒壊し、命からがら逃げ延びて避難所から仮設住宅、復興住宅での生活を余儀なくされた女性がいます。彼女は次のように分かち合ってくれました。「避難所で生活をしていた時、ボランティアの人の力は本当に必要で、そしてたくさんの励ましもそこから受けることができた。被災者たちの心を励ましたのは物資ではなく、温かな人の心でした。でもいつも一方で、私たちは施しを受けなくてはいけない程、とことんみじめで、もらって嬉しくないものでも「ありがとう」って言わなくてはならなかった。それが本当に辛くてみじめだった。ボランティアと対等な目線にはたえず、いつも私たちの目線が彼らよりも下だった。また来るねと去って行って、来た人はいなかった。ボランティアたちには自分の生活が用意されているが、被災者はこの壊滅した街が自分の現実だった。だから被災者の気持ちは本当には分からないということを知った上で、それでも寄り添いたいと願い続ける気持ちこそが、被災者の悲しみに寄りそう唯一の在り方かもしれない。」

私は今、足湯をひと段落させ仙台市内に滞在していますが、12日から再度、壊滅区域に向かいます。私たちをこの上なく愛してくださるイエスさまが自ら寄り添ってくれ、ささやかな奇跡を足湯のボランティアの中で起こし、働いてくれることを祈っています」

この向井さんの証言に、私たちキリスト教学校の果たすべき役割、働きが示されているように思います。当時、テレビなどでも「日本は強い」など、「強くあること」が繰り返し声高に叫ばれました。そんな風潮に対して、私たちは、むしろ「弱さ」や「小ささ」に徹底して寄り添い続けることの意味を、身をもって証し続け、私たちの大切な子どもたちに伝えて行く責任があるのだと思うのです。

私たち自身が、主から足を洗ってもらった弱い存在であることを胸に刻みながら、今、困難の中にある人々の足を洗い、手を温め、ゆっくりとその物語に耳を傾けながら、共にあり続けたい。私たちの学校が、私たち一人ひとりを、「愛して、愛し抜かれた」主に従って、そんな「足湯の学び舎」となることができた時に、そこに確かに主はたくさん

の小さな奇跡を起こし続けてくれるに違いないのであります。

宮城学院のみなさんは、『神を畏れ、隣人を愛する』という「建学の精神」を135年もの間大切にされてこられた「足湯の学び舎」なのだと思います。その歴史の中で、きっと、たくさんの小さな奇跡が、宝物のようにして散りばめられていることであらうでしょう。ぜひ、この宮城学院の歴史と働きに、みなさんは大いなる誇りをもっていただきたいと願います。

今、私たちは未だ、新型コロナウイルス感染症蔓延という試練の中にありますが、長い夜にも必ず、朝は訪れます。希望と共に、必ず朝は訪れます。恐れることなく、私たちが「愛して、愛し抜かれる」主に信頼しながら、さらなる旅に踏み出してまいりましょう。

祈祷

ひと言、お祈りいたします。

天の主なる神さま。主イエス・キリストは、不安に打ち震える弟子たちの足を洗いながら、弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれました。私たちも、時に弱く、小さな存在ですが、主はそんな私たちの手を温め、私たちの悩みや悲しみに耳を傾け、生きる勇気と力を与えてくださいます。私たちがそんな主に信頼しながら、今も続くこの困難な日々を乗り越えていくことができますように、どうぞ強め、励ましてください。

宮城学院は今日、創立135周年を迎えることができました。これまでの学院の歩みをあなたがお守りくださいましたように、どうぞ、明日からのこの学び舎をもあなたが支え、豊かにお導きくださいますように。宮城学院に属するすべての児童、生徒、学生、また、教員、職員、役員、そして同窓生、関係者のお一人おひとりの上に、あなたの限りない、励ましと御守りがありますように。

この祈りを尊き、ご復活の主イエス・キリストのみ名を通して、御前におささげいたします。アーメン